

元旦の朝、初詣に出かけた。十時になるのに空は暗く、白というよりも灰色に近いその空からは、湿気をたっぷり含んだ大粒の雪が、はらはらと落ちてきていた。履きなれたスニーカーで出ようとしたが、道が泥雪混じりと思い、ブーツに履き替えた。待ち合わせの時間は十時半、場所は地下鉄——駅の改札前だった。

道すがら、一匹の野良犬が横切っていくのを目にした。野良犬は見るからにみすぼらしく、目やにのこびりついた光のない目でこちらを一瞥し、のそのそどこかへ消えていった。野良犬は怪我をしているのか、左の後ろ足を引き擦っていた。「可哀想に」と思った後、「正月早々、あまり気持ちのいい光景ではないな。」という気持ちが興り、年明けの清々とした気分には水をさされたようで、被虐的な気持ちになった。

道の状態は最悪だった。雪は、昨夜から降ったり止んだりを繰り返してきた。気温はそれほど低くなかったために、地に落ちた雪はすぐに解け、どろどろと醜く姿を変えていた。「履き替えて正解だな。」しかし、自分の選択の正しさを誇る以上に、立体の水溜りと化した雪への憎悪が激しくのしかかっていた。道途中、大きな水溜りを避けるために、ぴよんぴよんと飛び跳ねた。動作とは裏腹に、心の中には今にも決壊しそうな、苛立ちを満々と湛えたダムであった。本人の意志とは逆に、周囲には喜びで小躍りしているように映る構図は滑稽であった。

地下鉄構内は混んでいた。ここへくるまでの陰気な風景に、努めて持とうとした年始の晴れやかな気持ちは萎えていたが、初詣仕様に着飾った種々の人々を見たとなん、「ああ、やっぱり今日は元旦なんだな。」と、安心させられた。喧騒もむしろ心地よかった。それぞれに明るい面持ちで、ここが、希望に満ちた新しい世界の入り口のようにも思えた。これから参る人、参り終わって帰る人、両方が入り混じっていた。向かう方向は逆だが、心の向きはみな同じのような気がした。みなが去年までの憂悶をリセットし、喜びとともに新たなスタートラインを迎える。「そうだ、この気持ちを持ちたかったんだ。夜明けとともにこの気持ちを持ちたかったんだ。」

彼女は五分遅れてやってきた。紅色を基調とした着物に袖を通し、肩にかかる髪をアツプにしていた。着物はいとこのお下がりらしい。以前、そう話していたのを覚えている。

「——」彼女が何か言った。だが、聞こえない。二人の距離は十メートルもなかった。向かい合った二人の間を家族連れが横切った。二人の子供が楽しそうにじゃれあっていた。聞こえなかったが挨拶程度と思い、「おはよう。」と言葉を投げた。

彼女はその場に立ち止まったまま、にっこりと、しかし困ったように微笑んだ。「——」彼女の口がもう一度動いた。今度ははっきり聞こえた。初めは理解できなかった。理解した瞬間、視覚を除いて自分の感覚が麻痺するのを覚えた。目は彼女をはっきりと捉えている。しかし、その輪郭もしだいに崩れ、汚れを溜めた水彩画の筆洗いのように、ぐにやぐにやと歪んでいくのだった。「何で？何で？」頭の中にはそれしかなかった。新しいスタートにはおおよそ似つかわしくない心情だった。

「ごはん粒ついてるよ。」彼女の口はそう言っていた。(二〇一〇年九月二十二日)